特集〈走る〉

走る爬虫類

千石　正一

もはや一昔も前だが、エリマキトカゲが大ブームになったことがある。頸のまわりの、舌骨によって支えられたフリルを拡げ、二本足で走る。あれである。マスコミに登場したそもそものきっかけは、「何か面白い動物を紹介して欲しい」という漠然とした要求に対し、オーストラリアに取材に出かけるTVディレクターにむかって、「コアラのついでにこういう動物も撮影してくれれば」と提言したことである。かくてエリマキトカゲは私の監修する「わくわく動物ランド」という番組のオープニングをつとめることになる。その後は視聴者からのアンコールによって同番組にも再三登場したが、着目した他番組やCMにも登場するところなり、空前のブームとなっていった。私自身はちょうどその頃アメリカにいたし、アイデア提供だけで他には何も関係なかったが、帰国して驚いたことには、一人歩きして、と

んでもない情報が乱れ飛んでいたことであった。

では何故それが受けたのだろう。外観的なひょうきんさは当然として、意外さが大きな要素になっていることは考えられる。コアラとかラッコとかパンダとか、ある意味での人間臭さを売り物にして人気物にしたてあげられた可愛い動物というのは、ほとんどが哺乳類なのだ。爬虫類の例は他にない。トカゲが走るのはかくも可笑しかったのだ。

トカゲだのヘビ・カメ・ワニといった動物群は爬虫類とされ、ことばの上からも「這う」というイメージが強い。欧米の各国語の名称にしても、爬虫類は「這うもの」という語源が多い。口腔に虫の這い跡の如くできるヘルペスと語源を一にしているのである。這うというのは腹を地につけ伏して行くことだろうが、機能する四肢をもたないヘビが這うしかないのは止むを得ざるところとして、四肢のある爬虫類というのは、実際には、なかなかどうしてよく走るものがいる。二本足で立って走るトカゲにしても、アガマ科・イグアナ科・テユー科等に様々なものがいて、ひとりエリマキトカゲの専売特許ではない。日本（琉球列島）にさえ、しばしの間なら二本足で跳ねるキノボリトカゲがいて、これはエリマキと親類のアガマ科に属しているから、顔つきも似たようなものだ。エリマキトカゲだけが受けるというのは、私としてはむしろ意外であった。

キャラクターとしてならエリマキより強烈と思えるのが、バシリスクである。中米産のイグアナ科のこのトカゲは、雄鶏とガマとの交雑である伝説の怪物に名前の由来がある。異様なトサカを持つ竜のようなこのトカゲに接した白人が、「これこそ神話のバシリスクの正体に違いない」と思っても確かに不思議はない姿をしている。怪奇な形に似あわず（爬虫類にはそういうのが多いが）果実や昆虫等を主食にしている温和なトカゲである。水辺の樹上に主に暮らしているが、身の危険を感じると、後肢のみで立ち上がって走り、水場に行きあうと、そのまま水

面上を走り去る。右足が沈まないうちに左足を出す、というやり方である。忍術か魔法のようだ。私はコスタリカで、多数のバシリスクが一斉に水面上を走る光景を目前にして呆然とした。現地ではその奇跡に因んでこのトカゲを「キリスト」と呼んでいる。

ワニというのも這うものだと思われている。水中は巧妙に（少なくともヒトよりは）泳げるにせよ、陸ではどてっと腹を投げだし、そのままずるずるとすべって水に入るだけ、というイメージが湧くのではなかろうか。しかし実際にワニが這うところを見た日本人はそう多くはなかろう。ワニは、陸では、状況に応じて、這い・歩き・走るのである。一般的には歩く。腹を地面から離し、堂々と体を持ち上げて歩く。沼地等の地盤の柔らかい所では、接地面積を多くし、エネルギーロスをしないように、這う。雪上での移動を考えれば、一回一回足を潜りこませてもがくより、すべって移動するほうが合理的なのはおわかりになろう。ワニは短距離のこの「腹すべり」もする。

さらに、ワニは走る。体が瞬間的には完全に宙に浮かぶから、跳ぶといってもよいかもしれぬが、ギャロップをするのである。馬の最も速い駆け方であるギャロップだから、ワニとても非常に速い。瞬間的には時速四〇キロメートルにもなる。カール・ルイスだとて絶対に追いつけないのである。ワニがそんなスピードを出すなんてのは、ふつうの想像の域を越えているのだが、事実は事実。我々は爬虫類のことを、不様だの何だの、少々見下し過ぎているようである。よく調べてみれば、我々には及びもつかない能力をいくらも潜在させているだろう。理解できない、異質なものを排除するのは、なにものに対しても、とってよい態度ではない。

（財団法人・日本野生生物研究センター）